

『源氏物語』における「ゆかし」の考察（八）

北村英子

本稿は、前稿——『源氏物語』における「ゆかし」の考察（七）——（大阪樟蔭女子大学論集」第三十一号）に引続き、「東屋」の巻を逐次用語例を検討していく。

これは「ゆかし」という語彙の持つ、語義・感覚・心理・好奇心・対象・用法等を追究しまとめることを目的にしたものである。

「東屋」の巻では、「ゆかし」という語は六例見当たる。それ等を示し、逐次検討吟味していく。

。宮渡りたまふ。ゆかしくて物のほさまより見れば、いときよらに、桜を折りたるさましたまひて、わが頼もし人に思ひて、恨めしけれど心には違はじと思ふ常陸守より、さま容貌も人のほどもこよなく見ゆる五位四位ども、あひひざまづきさぶらひて、この事かの事と、あたりあたりの事ども、家司どもなど申す。また若やかなる五位ども、顔も知らぬどもも多かり。一番目は、「ゆかしく」と形容詞の連用形で表れる。

語義を文脈に即して考えると、「物のほさまより見れば」と、実見している。これから勘案すると、この「ゆかし」の欲求は、視覚的欲求が働いているものと思われる。したがって、「見たく」と語積すると問題なく文意は通じる。即ち、「宮が（二条院の中の君の所に）おいでになる。（母君は）見たくて物の隙間から見ると、（匂宮は）たいそうお美しく、桜を折ったようなお姿をしていらっしやうて、自分が頼もしい夫と思って、恨めしいけれど心の中ではそむくまいと思っている常陸守より、姿も顔も人柄もこの上なく立派に見える五位四位の連中が、一同ひざまずいてお仕えし、この事あの事と、あれこれ自分の担当の事務などを、家司などの者達が申し上げる。また若々しい五位の男達の、顔も知らない人々も多かった。」と現代語訳することが出来る。この中将の君の見たく思うものは、匂宮の御様である。即座に物の隙間から覗いてみると、匂宮はとてもお美しく、桜を折ったような風情をしていらっしやる。そんなお

姿を突見し魅了する。中将の君の視覚的好奇心は、物の隙間から興味津津と覗くことよって満たされる。したがって、この用語例に表れる「ゆかし」の願望は、ただちに、実現可能になる。その間、中将の君の目と心は匂宮に対して強く惹きつけられ、感情は昂揚し落ち着かない。新鮮な感覚で捉えた匂宮は気品の高い美しい人物であり、中将の君の陽性心情が察知出来る。年長者で劣位者である中将の君という女性から、年下の優位者、匂宮という男性へ向けられた好奇心である。

では、次の用語例の検討に移る。

。宮、日たけて起きたまひて、匂宮「后の宮、例の、悩ましくしたまへば、参るべし」とて、御装束きうそうぞくなどしたまひておはす。ゆかしうおぼえてのぞけば、うるはしくひきつくるひたまへる、はた、似るものなく気高く愛敬あいけいぶききよらにて、若君をえ見棄てたまはで遊びおはす。御粥強飯みかひなどまゐりてぞ、こなたより出でたまふ。

二番目の用語例は、「ゆかしう」と形容詞の連用形で表れる。

語義を文脈に即して考察すると、「のぞけば……」と突見しているところから勘案して、この「ゆかしく」は視覚的欲求が働いているものと察せられる。したがって、「見たく」と語釈すると、文意は自然に通じる。即ち、「匂宮は、日が高くなってからお起きなさって、匂宮『后の宮が、いつものように、お具合悪くていらっしやるから、お見舞にまいらなくては』とおっしゃって、参内のための御装束などをお着けになっていらっしやる。北の方はお姿が見たいの

で覗くと、匂宮は端正に身づくろいなさっているお姿は、これまた、似るものもなく気高く愛敬がありきれいで、若君をお放しになれないで遊んでいらっしやる。御粥や強飯などを召しあがって、こちらからお出になる」と現代語訳出来る。この場面は先の一番目の用語例から続く叙述であるが、翌日匂宮は、日が高く昇ってからお起きなさって、皇后様のお見舞のために参内なさるので、衣裳を改める。中将の君が昨日隙見した時は、直衣姿の美しい匂宮であったが、この場面で、また、中将の君は覗くと、正装をして昨日以上に魅力があつて美しい匂宮を注視する。中将の君は匂宮に対してひどく執心し、好奇心を募らせている。

結局、本用語中に表れる「ゆかし」の用法は、年長者で劣位者である中将の君という女性から、年下の優位者、匂宮という男性へ向けられた好奇心で、あらたに再び「見たい」という視覚的欲求が昂揚し落ち着かないが、この欲求は、ただちに、実現可能となっている。露骨に見えない所にいる匂宮に心惹かれて仕方がない心情にかられ、中将の君は消極的で慎ましやかな態度で覗く。そして、気品高い美しい匂宮を突見し心が動揺する。不安定な陽性心情を察知することが出来る。

次の用語例を検討していく。

。恨みきこえたまふことも多かれば、いとわりなくうち嘆きて、かかろ御心をやむる襖ふせをせさせたまつらまほしく思ほすにやあらん、かの人形にんぎょうのたまひ出でて、中の君「いと忍びてこのわたりになん」と、ほのめかきこえたまふを、かれもなべての

心地はせずゆかしくなりにたれど、うちつけにふと移らむ心地はた、せず。薰「いでや、その本尊、願ひ満つたまふべくこそ尊からめ、時々心やましくは、なかなか山水も濁りぬべく」とのたまへば、はてはては、中の君「うたての御聖心や」とほのかに笑ひたまふもをかしう聞こゆ。

三番目の用語例は、「ゆかしく」と形容詞の連用形で表れる。

語義を文脈に即して考察すると、『源氏物語評釈』には、「ゆかしくなりにたれど」の部分で、「興味をそそられたが」と訳されているが、他の主な諸注釈書は、「ゆかし」本来の意義「見たい」と解し、「逢いたくおなりになつたけれども」と訳されている。今回ここにおいても逐語的に諸注釈書が示すように訳しておきたい。即ち、「薰が中の君をお恨み申されることも多いので、中の君はまったくどうしようもなく嘆息して、こうした御心をなくしてあげる御禊をおさせ申したいとお思いになるからであろうか、あの人形のことをお言い出しになって、中の君『ほんとにこっそりと、その妹がこの邸に来ております』と、ちらっと申し上げなざるのを、薰もいいかげんな気持はせず会いたくおなりになつたけれど、いきなり急に心を移す気持ちにはとてもなれない。……………」と現代語訳することが出来る。この文面から、薰が大君の人形である浮舟にゆかしくなつた意識は、やはり視覚意識が最も強く働いているといえるが、この「見たい」「会いたい」という視覚意識は束の間の思いで、中の君を前にして、急には浮舟に心を移せず、また、中の君の方に心を向ける。このように薰はまめ人ぶりを發揮し心が

揺れる。

さて、ここでまとめをしておく、本用語例の「ゆかし」の用法は、庇護者の立場にある薰という男性が、庇護されるべき立場の大君の人形である浮舟という女性に向けられた好奇心で、早く実見したいと所望するが、現前の中の君を見てその所望は打ち消される。しかし、やがて実見可能になるであろうと予測出来ることに對して「ゆかし」は用いられている。また、主体者の視覚意識の心裡には、陽性的な心情の昂揚を伴っているといえよう。

次の用語例の検討に移る。

女房「経などを読み、功德のすぐれたることあるにも、香のかうばしきをやむごとなきことに、仏のたまひおきけるものとわりなりや。薬王品などにとりわきてのたまへる牛頭栴檀とかや、おどろおどろしきものの名なれど、まづかの殿の近くふるまひたまへば、仏はまことしたまひけり、とこそおほゆれ。幼くおはしけるより、行ひもいみじくしたまひければよ」など言ふもあり。また、女房「前の世こそゆかしき御ありさまなれ」など、口々めづることどもを、すずろに笑みて聞きたり。

四番目の用語例は、「ゆかしき」と形容詞の連体形で、女房の言葉の中に表れる。

語義を文脈に沿って判断すると、「見たい」・「聞きたい」・「知りたい」の「ゆかし」本来の意義のうち、「知りたい」と解すると、自然に文意は通じる。即ち、「女房『お経などを読んで、功德のすぐれていることが書いてあるような中でも、香の芳しいのを尊いこ

ととして、仏が説いておおきなさっているのも、もつともなことですね。薬王品などに特別におっしゃっている牛頭栴檀ごずせんたん（インドの牛頭山に産する栴檀という香木）というのですか、恐ろしい名前ですが、まずあの大将様が近くで身動きなさると、仏は本当のことをおっしゃったのだと思われるのです。幼くていらっしやうった頃から、仏道の修行も非常によくさいましたのですから「などと言う人もいゝる。また、女房『前の世がどんなであったのか知りたい薫の御立派な御様子ですこと』などと、口々にほめる言葉の数々を、北の方は何となしに笑顔になって聞いていた。」と現代語訳することが出来る。この場面は、『法華経』で仏が説いておきなさったように、薫は実際に身体から素晴らしい芳香を放ち、まるで仏身の如くである。これは、「前の世」からの善根によるものであろうかと女房達がか、口々にほめたて騒ぐ。その様子を北の方は見聞し喜んでるのである。このように女房達は、体験不可能な「前の世」に好奇心が向けられているのであるが、これと同じように「前の世」を「ゆかし」という欲求で捉えた文例がすでに何箇所か見当たり検討してきた。その内「紅梅」の巻に、今検討してきたと同じような内容、即ち、薫の芳香は「前の世」の善根によるものであろうか知りたいという描写があった。再びそれを示してみる。

大納言 「さかし。梅の花めでたまふ君なれば、あなたのつまの紅梅いと盛りに見えしを、ただならで、折りて奉れたりしなり。移り香はげにこそ心ことなれ。晴れまじらひしたまはん女などは、さはえしめぬかな。源中納言は、かうさまに好ましようはた

き匂はさで、人柄こそ世になけれ。あやしう、前の世まゝの契りいかなりける報にかと、ゆかしきことにこそあれ。同じ花の名なれど、梅は生ひ出でけむ根こそあはれなれ。この宮などのめでたまふ、さることぞかし

とあり、この用語例に表れる「ゆかし」という欲求も、体験不可能な「前の世」に向けられた好奇心であり、「知りたい」という語義である。また、「桐壺」の巻や「紅葉賀」の巻においても、類似性を示す場面がみられる。

命婦 「上もしかなん。『わが御心ながら、あながちに人目驚くばかり思されしも、長かるまじきなりけりと、今はつらかりける人の契りになん。世に、いささかも人の心をまげたることはあらじと思ふを、ただこの人のゆゑにて、あまたさるまじき人の恨みを負ひしはてはては、かううち棄てられて、心をさめむ方なきに、いとど人わろうかたくなになりはつるも、前の世ゆかしうなむ』と、うち返しつつ、御しほたれがちにのみおはします」

。その夜、源氏の中將正三位したまふ。頭中將正下の加階したまふ。上達部は、みなさるべきかぎりよろこびしたまふも、この君にひかれたまへるなれば、人の目をも驚かし、心をもよろこばせたまふ、昔の世ゆかしげなり。

これ等の描写はいずれも、「前の世」に「ゆかし」と好奇心を向け、

（「紅葉賀」）

仏教上における「前の世」の所業が善行であったか悪業であったかの果報で、この世の幸・不幸が決まるといふ因果応報の思想を表した個所である。この個所に表れる「ゆかし」という語の意義は、いずれも「知りたい」と語釈すると、文脈上自然に文意が通じる。また、「知りたい」という欲求は、仏教思想における想像上の世界を体験してみたいと所望しているが、現世の人々にとっては、体験不可能なことに意識が向けられている。つまりこれ等、用語例の「ゆかし」はすべて未知の世界に対して好奇心を募らせ、意識が昂揚し、不安定な心情を伴っている。

さて、用語例四番目の本題に戻るが、この描写においても、今再度示したと同様に、仏教思想の観点で「ゆかし」は使用されている。即ち、女房達が「ゆかし」と所望しているものは、「前の世」の善根が、身体から香わしい芳香を放ち得ているのは、「前の世」の善根による結果であろうかどうかということ。これに志向対象がある。勿論、女房達は想像を逞しくし、想像上の未知の世界を脳裡に描き、体験可能な体験したいと願望するが、実際には不可能なことである。その不可能な想像上の仏教の世界に強い好奇心を募らせている。その意識下には不安定な心情を察知することが出来る。

それでは次の用語例を検討していく。

扇を持たせながらとらへたまひて、句宮「誰ぞ。名のりこそゆかしけれ」とのたまふに、むくつけくなりぬ。さるものものつらに、顔を外ほかさまにもて隠して、いといたう忍びたまへれば、この、ただならずほめかしたまふらん大将にや、かうばしきけ

はひなども思ひわたさるるに、いと恥づかしくせん方なし。五番目の用語例は、「ゆかしけれ」と形容詞の已然形で、句宮の言葉の中に表れる。

語義を文脈に即して考察すると、「聞きたい」と訳しても、「知りたい」と訳しても文意は通じるが、句宮の感覚は、聴覚的欲求を強く働かせているものと思われる。つまり、この用語例に続く段落文中に句宮が、「誰と聞かざらむほどはゆるさじ」と言っており、換言すれば「早く名前を聞きたい」ということになり、聴覚的意識をみせている。これから勘案すると、「誰ぞ。名のりこそゆかしけれ」の「ゆかし」は、「聞きたい」と語釈するのが最も適切である。要するに、句宮は美貌の女性の名前を「聞きたい」そして、誰か真相を「知りたい」と意識が働いていき、目前の女性に好奇心がこの上なく募る。このように解して、用語例を現代語訳しておく、「扇を持たせたまま手をおとりになって、句宮「誰です。名前が聞きたい」とおっしゃるので、浮舟は薄気味が悪くなった。そんな屏風などのそばで、顔を外の方に向けて隠して、大変ひどくお忍びになつていらつしやるので、あの、ひとかたならず懸想を私にほめかしなさるという大将（薫）かしら、芳しい様子なども自然に推し量られるので、浮舟は大変恥ずかしくどうしていいかわからない。」となる。句宮が目前の美貌の薄幸の女性に迫り、名前を聞いて知っていたがっているのは、もはやひたむきな情愛を渴望する心の表れである。

さて、「ゆかし」の用法は、句宮が美貌の女性の知らない名前を

聞きたいという、未知のことに對する聴覚的欲求を示し、その心裡には、懸想めいたうきうきした落ち着かない陽性心情を伴う。また、この欲求はいずれ、近い未来に「知る」ことが出来るであろうことに心が向けられている。こうした匂宮の好奇心は、いわゆる庇護者の立場にある男性から、庇護されるべき立場にある女性へ心惹かれる思いに使用されている。

次の用語例の検討に移る。

物語などしたまひて、晝方あひるがたになりてぞ寝たまふ。かたはらに臥せたまひて、故宮の御ことども、年ごろおはせし御ありさまなど、まほならねど語りたまふ。いとゆかしう、見たてまつらずなりにけるをいと口惜しう悲し、と思ひたり。

六番目の用語例は、「ゆかしう」と形容詞の連用形で表れる。

「ゆかし」の語義を考察するに当たり、まず、「いとゆかしう、見たてまつらずなりにけるをいと口惜しう悲し、と思ひたり。」の部分、どのように訳されているか諸注釈書の訳を見てみたい。『源氏物語評釈』では、「たいそう慕わしく、お目にかからずじまいだったことを、本当に心残りで悲しい、と思った。」と、「ゆかしう」を「慕わしく」と心情的に捉えて解釈されており、『日本古典文学全集』では、「父宮がほんとなつかしくて、ついにお目にかからずじまいになってしまったことをじつに残念で悲しいことと思う。」と、『全集』も「ゆかしう」を心情的に捉えて、「なつかしく」と解釈されている。また、『新潮日本古典集成』においては、「とてもお会いしたく、とうとう一度もお顔を拝せずに終ったことを、本当に

残念に悲しいと思っている。」と、「ゆかしう」を感覚的に捉えて「ゆかし」本来の語義、「お会いしたく」と解釈されている。『元訳日本の古典』においても同じく、「とてもお会いしたく、とうとう一度もお顔を拝せずに終ったことを、本当に残念に悲しいと思っている。」と、「ゆかしう」を「お会いしたく」と解釈しており、『日本古典文学大系』においては、「懐しく逢いたく。」と、注記が見られる。このように「ゆかし」本来の意味から派生した、「慕わしく」や「なつかしく」と解しても文意は無理なく通じるが、浮舟の意識の心底には、父宮を慕わしく思う気持ちや、なつかしく思う気持ちが潜在しているからこそ、会いたい気持ちが募る。したがって、先に見てきたように「ゆかし」の解釈は文脈的に種々認められ、一通りの意義を有するものでなく、一語の中に多様の意義を包含している。しかし、わたくしは、「いとゆかしう」にすぐ続く、「見たてまつらずなりにけるをいと口惜しう悲し、と思ひたり。」という文と、照応して勘案すれば、「ゆかし」は「会いたい」欲求を強く持ち続けていたものと思われる。よって、「ゆかし」の語義は「会いたい」と、「ゆかし」の本義で訳すのが、最も適切のように思われてならない。このように解して、六番目の用語例を現代語訳しておく。「お二人はお話などなさってから、明け方になってからお寝みになる。中の君は浮舟を傍にお寝かしになって、亡き八の宮のことどもや、長年お過しになったその様子など、ぼつぼつお話になる。父宮に浮舟はともお会いしたく、とうとうこの世でお目にかかれな

いままになってしまったことを、本当に残念で悲しいと思っている。」

となる。この場面は、中の君と浮舟の姉妹は初めて枕を並べて寝ながら、亡き父宮のことなどを話すと、浮舟は非情の父宮であったが、亡き父が恋しくなり、「会ってみたかった」として「話してみたかった」として「認知してはしなかった」と、亡き父に対して好奇心が募るが、浮舟のこの欲求は、現実化することは不可能なことに對して心が向けられている。満たされない不安定な浮舟の陰性心情を察知することが出来る。

結局、この用語例中の「ゆかし」の用法は、未知の人である亡き父に向けられた視覚的好奇心で、その欲求は今さら実現不可能なことに心惹かれ、後悔の念や不満や不安定な陰性心情を伴うといえる。

以上、本稿において「東屋」の巻における「ゆかし」の六例の用語例を検討吟味してきた結果、六例共形容詞で表れ、連用形が四例、連体形が一例、已然形が一例という割合で、連用形がやはり多数を占めているのは、文体上連用形が表れやすい機会が多く、その連用形のすべてが、「見たく」「会いたく」というように、視覚に関する意義ばかりで一致しているのは注目し得る。連用形以外の活用形即ち、連体形一例・已然形一例は、いずれも言葉の中に用いられている。このように見てくると、「ゆかし」の欲求は、視覚的欲求が圧倒的に多いのは、当時の生活様式や住宅の構造や部屋の仕切の中で隠された住む生活をしている場合が多く見られるが、その隠された世界に好奇心が向けられ、垣間見や透き見をしたいという意識が敏感に働く。このように王朝の人々は、当時の生活様式や住宅の構造から特に、視覚的好奇心が培われていったのではないだろうか。

用語例①②においてもその如く、劣位者の立場の年長の女性が、優位者の立場の年少の男性を透き見したく思う欲求を募らせている。用語例③においても視覚的欲求を表しているが、庇護者の立場にある男性が庇護されるべき立場にある女性に向けられた好奇心である。用語例⑥もやはり視覚的欲求を表しているが、劣位者の立場の年少の女性が、優位者の立場にいた年長の男性に向けられた好奇心である。用語例④は劣位者の立場の女性が、優位者の立場にある「前の世」の薫に向けられた好奇心である。用語例⑤においては、庇護者の立場にある男性が庇護されるべき立場にある女性に向けられた好奇心である。このように検討してみると、『源氏物語』も後半部になってきた「東屋」の巻においては、「ゆかし」の主体者が劣位者や庇護下にある者の好奇心が多く見られるようになってきた。それらの好奇心は実現可能なことに向けられる場合が多い。また、「ゆかし」という好奇心は、未知のことに對して、珍しいことに対して、憧憬するものに対して、強く心が惹かれる思いを示すが、それには、基本的には陽性心情が先行して働いている感がある。その心裡には、不安定な心や不満が伴っているといえる。

以上、本稿においては「東屋」の巻を検討吟味してきた。

(続)